
ひとりぼっちの運命

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとりぼっちの運命

【Nコード】

N5071D

【作者名】

原木野徹也

【あらすじ】

僕はいつだって一人で生きてきた。今更そんなものじゃない、『愛』なんて知らない……。REBORNの雲雀さんのキャラソンから妄想でできた小説です。ネタバレがありますので注意をお願いします。

愛なんて知らない（前書き）

I LOVE 雲雀！ってくらい雲雀さまのことが好きですが、性格とか喋り方とか実はよく分かっていません。そこをよろしくお願いします。

愛なんて知らない

そよそよと涼やかな風が吹く中、彼は屋上のフェンスに腕を預けていた。

彼の肩の上では、小さな黄色い鳥が微妙にずれた音程で彼の愛する並森中校歌を唄っている。

背後から、キイ、と扉が開く控えめな音が聞こえた。

誰かがこつちに向かってやってくる。

その「誰か」がだれか、彼には分かっていた。

ばささつと肩に乗っていた鳥が羽ばたいて、すぐに見えなくなる。

五歩ほど離れた彼の後ろで、その誰かは足を止めた。

「やあ」

誰かが口を開く前に、彼は振り向くことなく短い挨拶を口にする。
あつ、あの……、と少しどもりながら、相手もこんにちは、と挨拶を返した。

その言葉を聞いてから彼はゆっくりと振り向く。かしゅん、とフエンスに腕を組んでもたれかかった。

振り向いた先、彼の目の前にはあの草食動物　沢田綱吉がいた。

沢田綱吉は、少し前までは学校は連絡もなしに休む、制服はきちんと着ない、最近では半裸で校内を動き回ったりと、彼の美德に反する、風紀を乱す生徒だった。

一度噛み殺してやるうかと思ったこともあるが、あまりにもひ弱な草食動物だからと興味もなかった。

あの赤ん坊と出会ってから、少し変な奴だと思いなおしたが、それでも赤ん坊に興味があっただけで、この生徒には指して興味もないままだったけど。

むしろいつも三人で群れていて、見てるだけで苛々することが多かったと思う。

そのすべての考えが変わったのは、ついこの間のこと。

夜の校内での激しい闘い。

照明によって明るく照らされた校庭で動き回る沢田綱吉は、額と両の手から変な炎を出していた。

それはいつも学校で見かける沢田とはまるで違って、少し興味を持った。

あの草食動物となら一度闘ってみたい。

そう思ったのだ。

だがそれは、今ここにいる綱吉ではない。

今の彼には興味もないし、むしろ闘志の全くない綱吉の眼は苛々するものだった。

「あの…っ、雲雀さん」

「なに。話なら早くしてよね」

雲雀がそう言うと、綱吉はびくつと背筋を伸ばした。
少しおびえているようにも見える。

その表情が、なんだか好ましく思えた。

おびえた顔を見るのは嫌いじゃない。

「は、はいっ。ただ、その、……雲雀さんにちゃんとっておこう
と思ひまして」

「だからなにを」

「あの……、この間はありがとうございました」

そのありがとうが何なのか雲雀にはすぐに分かったが、何も言わ
ない。

「雲雀さんのおかげで、俺も、みんなも無事で、指輪も全部手に入
って……。ほんとに感謝してます」

「……別に。僕は強い奴と戦いたかっただけだし。学校で死なれて、
風紀が乱れても困るからね。君たちに協力したわけじゃない」

「そうですね。……でも」

綱吉は少しおびえたふうに笑うと、落としていた視線をあげて雲
雀を見上げた。

「でも、それで俺たちは助かったんです。ありがとうございました」
「……………」

雲雀は何も言わないで、ほとんど表情をかえずに綱吉から目線を
そらす。

「えっと、それと……」

「まだあるの？」

「はい、あの…、リボーンから言われて」

「あの赤ん坊から？」

「はい」

リボーン、という名前を聞いて雲雀はフェンスから身を起こした。
綱吉がびくつと身体を震わせる。

「礼と、それから、これからもよろしくお願いします、を言って来
いって」

（実際には守護者を逃がさないようにしっかりと捕まえとけ、って言
われてただけど。）

綱吉はそう思いながら曖昧に微笑む。

「あの、これからも、よろしくお願いします」

そう言って、すつと手を差し出した。

その手がかすかに震えているのに、雲雀が気がつかないわけがな
かった。

「これからも？」

苛々と綱吉の言葉を繰り返す。

「知ってるでしょ、君も。僕は群れるのが何よりも嫌いなこと。こ
れからなんて、あると思うの？」

「いや、その、えっと」

（あーもう、だから言ったのにリボーンのやつ！！雲雀さん引き留めるとか無理だって！）

視線を泳がせながらしどろもどろに言葉を考える。

「でも、あの……、雲雀さんが群れたくないって思っている、その」

「だからなんなの。はっきり言いなよ」

雲雀の言葉に、綱吉はまっすぐ雲雀を見つめる。

覚悟を決めたように息を吸って、次に見えた眼に迷いはなかった。

その眼に雲雀の背がぞくりと疼く。

「その……、俺はもう、雲雀さんのこと“仲間”だって思ってた……」

“仲間”。

この間も、そのようなことを言っていた。

炎と同じ瞳の色をして、まっすぐに相手を見据えて。

瞳の色こそ違うものの、その強いまなざしはあの時と同じだった。

くるりと反転して、また綱吉に背を向ける。

先ほどと同じようにフェンスに腕を預けた。

「……言いたいことはそれだけ？」

そう言うと、綱吉がびくっ身体を震わせたのが見なくても分かつ

た。

「えっと、はい、それだけ……、です」

「用がすんだなら帰りなよ。あそこで待ってるの、君の犬じゃないの？」

校門の向こうにある二つの影のうち、苛々と動き回っている方の影を指す。

綱吉が指の先を覗き込んで、あつと声をあげた。

「獄寺くん！山本！帰っててって言ったのに……」

その声が聞こえたのか否か、獄寺はぱつとこっちを向いて、ひらと手を振った。

同時に尻尾も振っているようだ。

「早く行きなよ。今回は見逃すけど、これ以上群れてるとこ見せたら……」

ジャキつと学ランの中に仕込んであるトンファーを取り出す。

日の光に煌いて、銀色に光った。

「ひいッ！ー！ごめんなさい！いつ、今すぐ帰ります！ー！」

慌ててそう言つと、ぺこりと勢いよく頭を下げていつもの彼からは信じられないほどのスピードで扉へと向かう。

「沢田綱吉」

彼が屋上から去る寸前、雲雀は顔だけ振り向けて綱吉を呼びとめ

た。

急ブレーキをかけて、綱吉が振り向く。

「僕は君の仲間になったつもりはないし、なるつもりもない」

「あ……」

綱吉は一瞬動きを止めて、視線をアスファルトへと落とした。

その瞳が揺らいで見たのは、気のせいだろうか。

「……でも、ここにいれば好きなだけ暴れられるみたいだし、面白そうだからこの指輪だけは持っててあげるよ」

そう言って、さっきからずっと握っていた指輪を顔の横に持つ。

先ほどのトンファーと同じように日の光にに煌いて、銀色に光った。けれど、トンファーのときのような恐怖を感じさせるような輝き方ではない。

どこか温かみのある明るい煌き。

それを見て、綱吉はふっと笑った。

「はい！ありがとうございます」

じゃあ、と言って今度こそ屋上から去って行った。

バタバタと階段を駆け下りていく音が大きく聞こえて、すぐに小さく下へと遠のいていく。

ぱさぱさと羽ばたきの音がして、黄色い鳥が帰ってくる。

雲雀はその鳥を指先へと乗せ、そのあとに肩へと移した。

肩に乗った鳥はまた校歌を唄い出す。

綱吉が来る前と何ら変わらない風景。

ただ、雲雀だけが先ほどとは違っていた。

ありがとう、と笑って去って行った時の綱吉の笑顔が頭に張り付いて、彼の愛する校歌ですらも耳を素通りしていく。

いつものように一緒に歌ってくれない雲雀を不思議に思ったのか、小鳥は歌うのをやめて両足ではね、雲雀の頬をつつく。

「ヒバリ、ヒバリ」

甲高い声で彼の名前を呼んだ。

「ああ、ごめん」

そう雲雀が答えると、小鳥はまた歌いだした。
それに合わせて雲雀も歌う。

「^{みどり}緑たなーびくー、並森の ……」

しばらく歌い、眼下に綱吉を見つけて口の動きが止まる。

山本と獄寺に挟まれて笑う綱吉の顔は、先ほど見た綱吉の顔とはどれも違うものだった。

嬉しくて、楽しくて、そんな明るい思いがすべて表されているような顔。

雲雀が見たことのない顔。

どうしてこんなにも表情が違うのだろう。

彼がずっと話している、大切に思っている仲間だからか？
彼らに対する、信頼、友愛の差か。

面白い。

ころころと変わる表情を見て、雲雀はそう思った。
それと同時に、苛々する。

あの三人が群れていることに対してはもちろんだが、それよりも
何よりも、自分に対して。

知らない綱吉を見るたびに、そこへ引き込まれていく自分に対して。
て。

今までずっと、だれにも頼らず、頼られることなく自分のためだけ
に生きてきたのに。

自分が思ったとおり、風紀を乱すものがあれば噛み殺して、強い
奴がいたら闘ってきた。
すべて、あるがままに。すべて、なすがままに。
そうやって生きてきた。

誰にも干渉されることなく。

それなのに、狂ってしまう。

沢田。

傷つきたくないのなら、これ以上僕に近づくな。

僕は孤独ひとりだからこそ、孤高くもの浮雲しゅんげんなんだから。

君が想う仲間のように、『愛』なんていない。

そんなもの、僕は知らない。

愛なんて知らない（後書き）

本誌の方ではこんな時間なかったですね……。

アニメの方で考えてください。

でもアニメだと、「これ以上巻きこみませんから!」「みたいなこと
言ってるし……」。

でもそんなこと言ったらファンフィクションにならないですね。

もうしばらくお付き合いをお願いします。

もつと離れた場所で（前書き）

雲雀様がヒステリック気味で、言っていることがハチャメチャです。カッコいいバリ様、ツナラブなバリ様がお好きな方はお控えください。

よろしい方はどうぞ。

もつと離れた場所で

イタリアにあるボンゴレの本部に、血に濡れた姿のまま彼は返ってきた。

真っ黒な背広に血が固まり、さらに深く闇に染まっている。

その姿のまま、幹部の者だけが入ることのできる本部の奥、自室へと戻る。

今日中に報告書を仕上げなければならないし、この姿でいることに不快を感じるはずもなかった。シャワーなら、すべてが終わってしまっただけでも遅くない。

彼は、血を嫌う草食動物ではないから。

やけに天井の高い廊下を歩いて自室の扉の前へと立つ。

ドアノブに手をかけて、何かに気づいたのか、表情を変えずに小さく息をもらした。

キイ、と小さな音を立ててノブは回り、扉が開く。

「ここで何してんの」

それとほぼ同時に、中に誰かがいると確信したうえで言った。誰か、が誰なのか、彼にはすでに分かっていたから。

中にいる人物もまた、雲雀の方は見ずに口元に寄せていたカップをかちやりとテーブルに置く。

雲雀が急に声をかけてきたことに驚きもしない。

もちろん、勝手に室内へ入っていたことについての弁解もない。

それどころか、待っていたと言わんばかりにゆっくりとした動作で立ち上がる。

今、この瞬間に雲雀が帰ってくると知っていたかのように。

「そろそろ、帰ってくる気がしてたんです」

彼　綱吉はそう言つと、ニコツと微笑んだ。

知っていた、というのはあながち間違いでもないだろう。

「……相変わらず便利だね、超直感^{ソレ}」

雲雀がそう言つと、綱吉は照れが混じった笑いを浮かべる。

「はい、まあ……。たまに、分かりたくもないことも分かつて、嫌になる時もあるんですけど……」

そう言つて複雑に微笑む綱吉は今、誰の顔を思い浮かべたのだらう。

マフィアという職業柄、死に直面するというのは当たり前だ。

それなのに、綱吉はいつまでたつてもそれを忌み嫌う。

ついこの間、正式に十代目を継いだばかりだとしても、それより以前にも何度も死闘を繰り広げてきたであらうに、いつまでたつても血になれない。

雲雀にとっては至福の時間でもある他マフィアとの乱闘でも、いつも苦渋の表情で早く終わることを願っている。

そのくせ、絶対にその乱闘から眼を離そうとしないのだ。

「で、なに」

「え？」

さびしげに微笑む綱吉に、そんなことは全く気にせず雲雀は訊いた。

「何か言うことがあるんでしょ。僕には用事なんて、何もないからね」

「……そうですね。でも、その前にお茶でもどうですか？俺が入れますよ」

綱吉は一瞬言いよんだあと、自分が先ほどまで使っていたカッブを持ち上げて言う。

そしてそのまま、雲雀が何も答えないうちに、各部屋に備え付けられているキッチンへと向かおうとした。

それをさえぎるように雲雀が綱吉の前に立ちはだかる。

綱吉の身体がびくつと止まった。

「用がないなら出て行ってくれろ？」

「……分りました」

綱吉はもう一度言葉を発することをためらい、雲雀の強い、怖いほどの眼差しを見た後、頷いた。

くるりと背を向けると、先ほど自分が座っていた場所へと腰を下ろす。

雲雀にも座るように、と手で示した。

それに従い、雲雀はその向かい側へと腰を下ろす。

雲雀が席に着いたのを見て、綱吉はゆっくりと口を開いた。

「まずは……、お仕事、ご苦労様でした」

組んだ手を膝の上にのせ、まずそう言う。

何気ない一言のはずだが、綱吉の言葉に、雲雀はびくつと眉を動

かした。

「俺はこの間、正式にボンゴレ十代目となりました」

「知ってるよそれくらい。僕も出たんだから」

「はい、そうですね。…本当はその時すぐに言おうと思っていたことなんですけど、雲雀さん、すぐに抗争に行ってしまったので」

綱吉はそこまで言ったのはいいものの、そのあとにつづく言葉を発そうとはまだしない。

目がうるうる泳いで、まるで何かに脅えているようにも思える。それを見て、雲雀は中学生だった頃のあの日を思い出していた。

苛々する。

まだ、彼は小さな草食動物のままなのか。

血に濡れる肉食動物ほくを恐れているままなのか。

「……俺はあなたの上司ボスになった。だからもう、敬語を使うのはやめる。山本も、隼人も、もちろんリボンも、守護者や幹部はみんなあなたのことを『雲雀』と呼んでいるのに、俺だけそうしないのもおかしいかなと思って。だから、俺も『雲雀』と呼ばうと思うんだ。……わざわざ伝えることもないかと思ったんだけど」

あの時と同じように、決心したように雲雀をまつすぐ見据えて、言った。

その瞳は揺らいでなどいない。

ここ何年かいつも見せている、強い瞳。

イタリアへと渡ることになったときも、九代目が引退し、十代目就任が正式に決定したときも、一度も揺らぐことのなかった瞳。

それが、雲雀に向けての言葉に迷い、揺らいだ。

そのことが何故か誇らしく思え、また何故か見ているだけで苛々とした。

背筋がぞくりと疼く。

胸の奥から湧き上がってくる、もの。

むくむくと湧き上がってきた怒りは、群れている人間を見つけた時よりも、並中が汚された時よりも強いものだった。

目の前で綱吉が、それだけだよ、と言って立ち上がる。

何故かはわからない。

ただ、どうしようもなく腹立たしかった。

気がついた時には、自室から立ち去ろうとしていた綱吉を壁へと押し付けていた。

「何言ってるの、君？」
「……………」

頸^{くび}に当たる冷たいトンファーに、綱吉が身体を震わせる。けれど、恐れてはいない。

先ほどよりは弱まった眼で雲雀を見上げる。

「君がボスだということは認める。この指輪も君がいる限り持ち続けると誓った。確かに僕は君の部下^{じふが}だ」

ぐつと顔を近づけて雲雀は綱吉に詰め寄る。

鼻先が触れそうなほど、近づいた。

「だけど、それは名目上での話。僕は君の手下ではないよ。知ってるでしょ、君も。僕は群れるのは嫌いなんだ。たとえ、見た目には大空^{キミ}のすぐ下にいても、実は遠く離れている、誰にも干渉^{キミ}されない、されてはいけない浮雲だ。たとえ、すべてを抱え込んでいる、大空^{キミ}でも」

似合わず語気を荒げ、切羽詰まった様子で綱吉に詰め寄る雲雀を、綱吉は憐れむような瞳で見つめる。

その瞳^めが、さらに雲雀を苛つかせた。

他の誰とも違う、深く深く潜り込んでくる綱吉。

いつも一人でいた。

高く積み上げてきた孤高という名のプライドが、彼といるだけで崩れ去ってしまいそうだった。

『敬語』という壁があつたからこそ保たれてきた孤高^{プライド}。それを君は崩そうというのか。

さらに僕の中へと入りこもうというのか。

これ以上に、僕に近づこうというのか。

「……これ以上、僕の邪魔をするな」

「……………」

苦しげに眉を寄せる雲雀を見て、綱吉は何も言わない。
ただ、瞳を見つめるだけ。

「仕事の話で以外、僕を呼び寄せるな」

「……………」

「大人しくしていなよ。君は、ファミリーに近すぎる。大空は、誰よりも高い所にいるべきなんだ」

「……………」

「もっと離れた場所で、世界全体を見守らなければならぬ」
ファミリー

「……………」

「そうしていれば、僕は君の邪魔になるようなことはしないよ」

「……………」

「これ以上、僕に近づくな……………！」

これ以上、踏み行ってくるな。
他の奴らと同じように僕を扱うな
……。

君のような奴は苦手だ。

分かりやすいくせに、僕の中に踏み込んでくことを止めることはできない。

分かりやすいからこそ、真っ直ぐすぎて、傷つくことも恐れなくて、踏み行ってくる。

いつも、どこか怯えた眼で僕を見ていた奴らとも。

いつも、僕につき従ってきた奴らとも。

いつも、僕と対等であり続けている守護者とも。

他の誰とも、どんな奴らとも違う。

最初はいつも怯えていたくせに、いつの間にか誰よりも強い、高い存在となってしまうた。

もう、誰かを恐れることはないのであらう、あの瞳^め。
あの瞳が僕を見つけるたび、恐れとは違う震えが背筋を走る。

それなのに、今日、彼は何を恐れたのか。

もちろん、僕に対してではないだろう。

それでは、何に。

もしかしたら、僕と同じものに対してだろうか。

誰かの奥^{「」}へと潜り込んでいくことに対して。

誰かに、潜り込んでこられることに対して。

誰かのすべてを知ってしまうことに対して。

誰かに、自分のすべてをさらけ出してしまうことに対して。

必要以上に、誰かに近づくことに対して。

それが、何よりも恐ろしく、怖い。

そのことを考えるだけで、調子がくるってしまふ。

綱吉というだけでそのことを考えてしまふ。

調子が、狂う。

狂ってしまう。

僕が僕でなくなってしまう。

その前に、離れなければ。

その前に、離さなければ。

「僕に、近づくな………！」

もっと、離れた場所で生きていなよ。

そうすれば、君が傷つくことはない。
何かを恐れる必要もない。

生きるのに愛が必要なほかの守護者^{せうごしや}とは違うから。

愛なんて、そんなもの知らないから。

僕には必要ないから。

僕にまで、愛^{そんなもの}を分け与えようとするな。

返すものなど何もない。

いつだってひとりぼっちで生きてきたから。

愛し方が、分からないんだ
……。

もつと離れた場所で（後書き）

雲雀のキャラソンはツナへのラブソングだと思って妄想しました。

「愛なんて知らない、愛し方分からない」って、要するに、「君を愛したいけどどうしたらいいのかわからないんだ」ってことでしょ？ そうだと私は信じています。で、その相手はツナ。

山本じゃ手は震えないし、ディーノも手を震わせたりしないでしょ。もちろんムツクも。

分かりやすくまっすぐって言ったらツナしかないでしょう！

十年後でも、ツナが雲雀にタメ口を使ってるのが想像できなくて、きつと未来でも敬語なんじゃないかなあ、そうだったら理由はこんな感じかなあ、と思つてできた作品です。

そんなわけで妄想でした。

本文中の、「綱吉の言葉に雲雀はびくつと眉を動かした」のところが理由は、知っていらつしやる方も多いと思いますが、「ご苦労様」という言葉は目上が目下の者に対して使う言葉だからです。雲雀はそれを知っていて、今までは「お疲れ様でした」だったから、驚いていたんですね。

この先はさらに妄想を深めた思いつきり九年後（？）捏造物語です。しばらくのお付き合いをよろしくお願いします。

大空のない世界（前書き）

本誌ネタバレがあります。

大空のない世界

それからしばらくして、綱吉はファミリーに最も近いボスとしてマフィア界でも有名になった。

守護者はもちろん、最下層の立場の者まで目を配り、微笑みかけ、ファミリーが欠けることを何よりも嫌った。

綱吉はファミリーを愛し、同じようにファミリーから愛される。ファミリーは綱吉を心から慕い、綱吉もそのことを喜んだ。

誰もが綱吉には心を開く。

心優しい、最強のボス。

けれど、そんな綱吉といつまでも距離を置いているのが、雲雀だった。

何を言われようと誰かに媚びるつもりはない。

僕はファミリーなんて知らないよ。ここにいると思う存分闘えるからいるだけだ。

それが彼の口癖でもあり、誰とも馴れあわない理由でもあった。

他の守護者や幹部、おもに山本や獄寺に、お前がいつまでも他人行儀だから十代目^{ッナ}が悲しそうな顔をしてる、というようなことを言われ、すっかり口癖となってしまうたのだ。

あの日の言葉通り、綱吉は雲雀には必要以上に近づかない。

任務や会議のとき以外は雲雀と顔を合わせないし、ましてや言葉を交わすことなどほとんどなかった。

雲雀はそのことに内心ホツとしていて、なんとか自分を保つことができている。

それが狭く、堅苦しく、息苦しいことだとしても、誰かに心を許すよりは何倍もましなことだった。

「これからよろしくお願いしますね、雲雀さん」

その日、綱吉は何年かぶりに任務にまったく関係のない言葉を雲雀にかけたという。

九年前のあの日と同じ言葉を、あのときは全く違う瞳で雲雀に言ったのだ。

彼らしくもない、押し付けるような言い方で。

雲雀がこれからもずっと此処ボンゴレにいと決め付けた上で。

雲雀は声をかけられた時に一度だけ足を止めたが、すぐに何事もなかったかのように部屋を出た。

その時微かに感じた違和を、彼はもっと深く考えるべきだったのだ。

今更そう思っても、もうすべて遅いのだが。

そして。
。

パンツ……………。

「…………え？」

その日、ボンゴレ中が驚愕した。

その連絡を聞いた途端誰もが思考を停止させ、次の瞬間には泣き出すか、暴れ出すか。

嘘だ、嘘だ、嘘だ！と、喚き散らす者もいたという。

雲雀も、表情や態度こそ変えずにいたものの、かなり茫然としていた。

話がうまく飲み込めず、らしくもなく訊き返してしまったほどだ。

その日、ボンゴレ十代目^{デーデモ}、沢田綱吉が打たれ、死亡した。

「バカじゃないの、君」

誰もいない森の中、そこにひっそりと横たわる棺に向け、雲雀は言った。

綱吉死亡の連絡が入った後すぐに綱吉の遺体は運ばれ、その明日みょうにちには追悼式が行われた。

多くのマフィアが集まる中、綱吉はファミリーに永遠の別れを告げ、この小さな箱の中にしまい込まれたのだ。

その後、生前から彼が望んでいた、彼の生まれ故郷である並森へと棺は移され、近年では珍しくなったこの森へと安置された。

雲雀は、誰にも何も言うことなく、一人で懐かしい並森の地へと再び趣き、今、こうして棺桶を見下ろしている。

さあつと風が吹き、彼のずいぶん短くなった髪をさらう。
片隅に生えていた小さな花の花びらが風に吹かれて飛んで行った。

しゃがみこみ、小さな花をひとつちぎった。
それを、何も言わずに棺の上にのせる。

花は強く吹く風に当てられ、やがて落ちた。
しかし雲雀はそれを拾おうとはしない。

「やっぱり君は、いつまでも草食動物のままだったんだね」
代わりに一つつぶやいた。

綱吉は、ミルフィオーレファミリー・ブラックスペルとの抗争で
射殺された。

話によると、綱吉は打たれそうになった仲間の身代わりになった
らしい。

結局、その守った仲間も、同じ時に殺されてしまったようだが。

ファミリーを愛する綱吉にすればもつともな行動だったかもしれないが、
雲雀にしてみればそれはただの莫迦な行動にしかない。

賞讃の言葉など出せる訳もない、無謀な、莫迦のような行動。

まるで、弱い群れを守ろうと肉食動物に立ち向かう、草食動物の
ように。

だけど、君は忘れていたのではないか。

ボンゴレは決して弱くなどない。

ファミリーが一人欠けたくらいではどうなるわけもないだろう。

それは君も分かっていたはずだ。

弱い者は見捨てる。

この数年間、そうやって生きてきたはずだ。

それなのに、何故、いま。

君は本当に分かっていたのか？

ボス、というのが何であるかを。

確かにボンゴレは、ファミリーが一人欠けたくらいでは絶えることはない。

けれど、ボスがいなくなれば話は別だ。

皆が混乱し、群れは一気に弱まる。

弱くなった群れは格好の餌食だ。

事実、今現在ボンゴレは危機に陥っている。

だから、僕は群れるのが嫌いなんだよ。

群れなくても一人で生きれるようであれば、強くなどなれないんだ。

「……僕は、近づくなと言っただよ」

棺に記されたXの称号を手でなぞる。

「もっと離れた場所で生きていろ、と言っただよ」

棺桶からそつと手を離し、その上に顔を伏せる。

「こんなに離れるなんて……、ファミリーを見守ることをやめろなんて一言も言っていないんだよ」

小さくつぶやいた言葉は風に流されて、消えた。

「莫迦だよ、君は……」

君は決して弱くはなかったけれど、頭が悪いんだね。

自分がいなくなったらどうなるか、とか、考えなかったの？

守護者^{ほくら}は君がいなければ何にもならない。

守るべき君主がいらないのなら、それはもう守護者などではない。

それよりなにより。

大空がいなくなってしまうたら、雲はどつやつて生きていけばいいんだ。

分かってるの？

大空のない世界なんて、僕には何の意味もないのに
。

大空のない世界（後書き）

この話はすべて妄想です。

ツナが射殺されたというのは本当のようですが、どここの抗争で、とかはすべて妄想です。

途中話が思い浮かばなくていまいち尻切れトンボですが……、いいんです。

書きたいことは全部かけたので。

評価、感想いただけたらとても励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5071d/>

ひとりぼっちの運命

2010年10月10日14時12分発行